

## コラム58：ベトナムの旅 前篇 （2017年6月）

私は旅行というのが好きではありません。

特に海外旅行はキライですね。この齢になるまで、ずいぶん海外へ行きましたが、ただの一回も自分が望んで行ったことはありません。仕事で行った場合は別にして、その他については、すべてウチのカミサンの希望(命令?)にシブシブと従ったというのが本当のところなのです。彼女は、どうしてそんなに旅に出たいのかって？それには大した理由はないのですよ。

♪～知らない街を歩いてみたい

どこか遠くへ行きたい～♪ （'62「遠くへ行きたい」永六輔作詞）

そういうことなんです。彼女の場合、時にそういう欲求を押さえられなくなるらしいのです。きっと先祖は、モンゴルあたりの「遊牧民族」に違いありません。「血が騒ぐ」とでも言うんでしょうかね。騎馬民族ですから、馬に乗って旅をしたくなるんでしょう。困ったモンです。そこへいくと私の場合は、南方で焼畑農業なんぞやっていた「農耕民族」のようで、毎日同じ生活をして、土を耕している方が自分に合っていると思いますし、海外なんぞ旅行したいとは思わんです。

そうは言っても、「旅に行きたいね」と言い出したら、そう簡単にあきらめる性格ではありません。私はシブシブながら、交渉に入らなくてはいけないんですね。イチゴ栽培にあまり支障がない時期に、どこかあまり遠くない安く行ける所で、二人とも行ったことのない場所で、などいろいろと話し合いを重ね、今回は最終的に設定した国が、「ベトナム」というわけです。

カミサンが「ヤッパリ、これが一番いいよね」と言って、最終的に見つけてきたのは、H旅行社の「はじめてのベトナム縦断6日間」というツアー。インドシナ半島の南北1650キロ、長細いS字カーブを描くベトナムの国土を、たった6日間で全部見て回るというプランです。福岡空港から北部のハノイに着いて、次の日は中部ベトナムのフエへ飛行機で移動し、2日間滞在して、今度は南部のホーチミンへ再び飛行機移動して、半日観光の後に機中泊にて帰国。旅行日程を見ただけで、シンドクなりそうなプランでした。しかし、準備その他をカミサンに全部オンブしてしまった弱みもあって文句も言えず、ともかく添乗員もいることだし、「オトナシク後ろに付いて行くか」と、何の予備知識もなく、イヤイヤ出かけたという「消極的な旅」でした。



### ◎乗る

私が海外旅行が嫌いな理由は「飛行機が苦手」ということもあります。正直に言って、あんなモノが空を飛ぶことが信じられんのです。数えきれない位乗りましたが、金属の巨体が離陸する時の、自分の体が浮き上がるような感覚はイイもんじゃあないです。いつかは死ななくてはならないのは、わかっているのですが、高い所から落ちて死ぬというのは勘弁してほしいです。こういうのは「高所恐怖症」というやつですかね。

飛行機が嫌いな理由のもう一つは、「搭乗手続き」ですね。空港に着いたら、まずは航空会社のカウンターに行って、旅行社からもらった「チケットお客様控え」(航空券)なるものとパスポートを提示して搭乗券を受け取り、機内持ち込み以外の荷物を預け、クレームタグ(荷物引換券)を受け取

る。それから搭乗手続き((チェックイン))に入るわけですね。セキュリティーチェック(保安検査)と、パスポートを提示して出国審査を受けるわけです。どちらもやたらと並んでいるので、これらの行程をすますのに、時間がかかりますよね。忍耐が必要なのです。今回使用したベトナム航空は、けっこう検査が厳しくて、毎回靴を脱がされましたね。やっとのことでここを通過して、出発ゲートまで徒歩とバスで移動して待機。搭乗の受付が始まったところで、搭乗券とパスポートを提示して、やっと飛行機に乗れるわけです。そして、着いた所で入国審査を受けて、飛行便名が表示されたターンテーブル(BAGGAGE CLAIM)へ行き、長々と待ったすえ、自分の荷物を取る。今回の旅行で4回飛行機に乗りましたから、こんな手続き作業を、その回数だけ繰り返したことになります。

6月6日午前10時40分 福岡空港を離陸して、北部ベトナムのハノイへ。飛行時間は約4時間。狭い座席に固定されて、「エコノミークラス症候群」との闘いの末、現地時間午後0時40分に到着。日本との時差は2時間。空港の外に出ると、ムワーとしたスゴイ熱気と湿気。「コリャ！暑いわ！」そこで、私は「南の国」に来了ことを実感しましたね。迎えてくれた現地ガイドは、若いベトナム人男性。「ようこそベトナムへ！現在の温度は34度。湿度は80%ですね。46年ぶりの暑さですよ！」

大型バスに乗り込み、ありきたりの市内観光をサラッとすませると、一路ハロン湾へ。配布された日程表に、本日の移動時間約250kmと記されています。一般道ですから3時間位はかかるでしょうな。「ヤレヤレ！ツマラン旅よのう！」とバスの最後尾で、ふてくされて外をみていると、車窓の向こうに、イロイロとオモロイ風景が見えてきたのですよ。

まず目についたのはバスの側を走るバイクの異常な多さですね。それも車道の端を遠慮がちに走っているのではなく、バスの前後左右をスレスレで取り囲むように走るのですね。つまりは、この街の道路の「主役」は車ではなくバイクなのですね。それも二人乗りや三人乗りは当たり前で、時に四人乗りも見かけるといった状態。日本の常識では信じられぬことですが、4人乗れるのですよ。



まず、ハンドルを握る大人の前に一人の子供。そして後ろの荷台に大人が乗り、運転席の間にもう一人子供を挟むのです。雨の時のバイクは大変だと思うのですが、なんせ雨季がある国ですから、いいカッパがあるんですよ。運転席から後ろまでスッポリと包んでいます。しかし、補助席の子供は、何にも見えない状態になりますから大変ですね。一応「大人は二人まで、子供は制限なし」という規定はあるようで、このルールはちゃんと守っていることになりますね。



なかには洗濯竿のような長い棒状の荷物を担いで運転しているオッサンがいたり、リヤカーのごとき荷車をバイクに繋いでいたり、運転席が見えないような巨大な荷物を後ろに載せていたり、その辺のルールがあるのかないのか不明です。右側通行とヘルメットの着用は守られているようですが、いずれにせよ、こんなに沢山のバイクに囲まれて、こんな無秩序な状況の中で、自分で車を運転したくないと思いましたよ。

日程二日目に中部ベトナムのフエの街に泊まり、翌朝に朝食をすまして、近回りを散策しました。早朝の7時過ぎですから、通勤の始まる時間帯ですね。二人でホテルを出て、橋を渡って交差点まで来た時に、奇妙なことに気が付いたのですよ。「ここって信号も停止ラインもないよね」「事故が起こらないのが不思議だね」





田舎の道路ではありませんから、道路幅は10m位。かなりの数のバイクと車が行き交っている街中の広い十字型の交差点ですよ。見てみると、事故もなく、ともかくはスムーズに車両が行き交っているのですからね。

この日にフエ市内のドンパ市場という所に行きました。野菜、果物、魚、そして花、あらゆる食物と生活用品が並び、何でも売られているという感じの、熱気と活気に満ちたところでしたよ。狭い通路に人とモノが溢れ、人が行き交うのもシンドイような場所。何とこんな場所にも、バイクが突入してくるのですよ。これがやたらとクラクションを鳴らすんです。激しく「ビー」「ビビー」という感じで、「コラ！ドカンかい！」と、怒鳴り散らしているような乱暴な鳴らし方ですな。私は思わず添乗員さんに「文句」を言いました。もちろん、彼女の責任は全くないのはわかっています。

「こんな所によくバイクを入れますよね」

「この国はバイク社会ですから、しょうがないんですよ」

「こんなんで、事故なんかないんですか？」

「小さい事故は、よくあるんでしょうけど、問題にならないんですよ」



市内観光をしていると、車が頻繁に走っている道路を横切らなくてはいけない時があります。これがけっこう「勇気」がいるのです。大抵はガイドさんが、旗を上げて「ハイ！皆さん渡りましょう」と言ってくれるのですが、時には自分で判断しなくてはいけないこともあります。近くにバイクが迫っているので待っていると、逆にガイドさんに怒られるんですよ。

「待っていると、いつまでも渡れないですよ！前に出れば、向こうが止まってくれます！」

……もし、止まってくれなかったら、どうなるんですかね。「先に出了方が勝ち」という考えは、日本人にはすぐには馴染めないですが、中国でも交通ルールについては同じことを聞きましたね。

## ◎話す

今回のツアーに参加したのは、九州を中心に31名。私達のような熟年夫婦もありますが、中心はヤタラと元気な、旅行好きの年配女性のグループですね。推定の平均年齢は70歳前後という感じでしょうか。いっしょにバスに乗り、観光をし、食事をすれば、自然に雑談をするようになるんですが、私はなんとなく居心地が悪いのですね。自分のことをどこまで話すべきか、相手の事をどこまで聞いていいのか、要するに構えてしまうのですよ。この傾向は私を含めた男の場合に多いようですね。そこへいくと女の方はけっこう自由に、ペラペラ話してますよ。いわゆる「オバサン」と言われる年配の女性は、「ソナナこと全然気にしない」という感じです。こういうのは、コミュニケーション能力が高いとでも言うんでしょうかね。ウチのカミサンもその典型です。誰かれとなくツマラン話をしていましたな。

「ちょっと旅行に行くのでも、いろいろ大変ですよ」

「そうそうウチも同じなのよ」

「ウチはお年寄りもいるし、イヌも預けなくてはいけないんですよ」

「へー！ウチもワンちゃんいるんですよ。なに犬です？」

「ウチはコーギー！これがワルイんで大変。オタクは？」

「ウチはブルドッグなのよ」

……まあ、こんな調子で屈託のない「雑談」を楽しんでいる感じなんですね。母が通っている介護施設でも9割は女性です。女が男よりも長く生きる理由が、わかったような気がしました。

旅行の楽しみは、その国の現地の人と会話し、少しでも心の触れ合いを持つこと。それはわかっているのですが、実際には「言葉がわからない」というハンディもあり、難しいですね。とくに団体ツアー旅行の場合は、個人的に動くと他の人に迷惑をかけることになりますからね。しかし、そんな状況であっても、その気になれば現地の人と交流できるのですよ。「現地ガイド」という人がいるじゃないですか。私はツアー旅行の最大のメリットは、このことだと思いますね。



一日目のハノイと二日目のハロン湾クルーズを案内してくれたのは、ティエンさん。スラリとした体型のなかなかのイケメン青年。年齢は推定30代半ばという感じですかね。「ベトナムでは、夕方の6時から9時は、飲酒運転タイムと言われているですね」という感じの、彼のブツチャケ話は楽しかったですよ。一番意外に思ったのは、「ベ平連」(注1)という言葉が彼の口から出て、このことが日本との友好関係にいい影響があったと、聞いたことです。彼はベトナム戦争の頃には生まれてもいない世代ですね。あとで個人的に聞いてみました。「私は歴史を勉強したんですよ。日本も戦争の時には、ベトナムでヒドイことをしています。そのことを今は、私達は口に出して言わないだけなんですよ」。私はよく知らなかったのですが、太平洋戦争当時に、日本軍がベトナムに進駐していた時期があり、ベトナム人に対してヒドイことをした史実があるようです。

三日目から帰国までの案内は、37歳の「堺雅人」似の青年(名前は忘れました)。「ソックリですね」、と言うと「よく言われます」という返事。彼はサービス精神旺盛で、日本の歌を披露したり、宮廷の王様の歩き方を見せてくれたり、と楽しいガイドをやってくれました。彼の話では、北と南では同じベトナムでも気質が丸っきり違うのだそうですよ。「結婚相手見つけるの、北では大変ですが、南なら、公園に行けば30分で見つかりますよ」などという話は、「ホントかいな!」と思いましたね。ベトナムの若者には厳しい現実があります。男子には、18歳から28歳のあいだに二年間の兵役義務があるのです。もっともこれには抜け道もあるらしく、彼は大学で研修を受けることで免除されたと言っていましたね。



## ◎見る

今回のベトナムツアーのメインの観光の一つが、二日目のハロン湾のクルージングです。カルスト地形の、2000もの奇石がそそり立つ湾内を、三時間かけて遊覧船から眺めつつ、海鮮料理を味わう、という優雅なプランですね。ところが、朝からどんよりと曇り、雨がシトシト降っているのです。「これじゃあ、景色がよく見えないよね」カミサンも残念そうです。遊覧船に乗り込んでも、雨は治まらず、現地ガイド氏のからの注意。「上のデッキに上がるのは、足を滑らすと危険ですからやめてください」。下の客室から窓の外を見ると、沢山の遊覧船が浮かんでいるのが見えますが、世界遺産となっている風光明媚な景観は、曇っていて見えない状態でした。「せっかく、ここまで来たのに残念じゃねえ」 半ば諦めていた時に、雨が止んできたのですよ。





上のデッキに上がってみると、屋根がないだけにスゴイ解放感。皆さんゾロゾロと上に上がってきます。それほど大きな船ではありませんから、私達ツアー客だけの貸切状態。お互いに写真を撮りあったりしながら、幻想的なパノラマ風景を楽しみましたよ。さすがに雨のために水面は濁って、「青い海」とはいきませんでした。湾内の波は穏やかで、不思議な形をした島もよく見え、柔らかな南国の潮風を感じました。この時に初めて、「来てよかったな」と思いましたね。



一時間も遊覧すると、船は湾内の島に横付け。有名な鍾乳洞を見ると言うんですよ。この観光はかなり大変でした。ハロン湾全体がユネスコ世界遺産となっているだけあって、やたらと観光客が多く、海外からだけでなく、ベトナム国内からも団体客が多いらしいのです。そして、鍾乳洞への道幅はとても狭いのです。前の人の速度に合わせてキツイ階段を登って洞内に入ると、内部は20 m 位の高

さのドーム状の空洞になっています。スポットライトに照らされているものの、薄暗い洞内をだらだらと下り、少し広い場所で奇怪な景色をバックに急いで写真を撮り、またゾロゾロと人の流れに付いて上に登って、やっと外に出てきました。時間にして30分程度。鍾乳洞事体はそう広くもないのですが、かなりの高低差とムワットした暑さの中、まるで、ラッシュの電車の中で移動したような観光でした。現地ガイド氏が観光の前に、「足に自信のない人は、船に残っていてもイイですよ」と言った意味が、後でわかりましたよ。



ラッシュと言えば、この島に遊覧船を停泊する時もスゴイです。もの凄く沢山の船が一気に押しかけ、停泊の場所は限られているわけです。おとなしく船が出てくるのを順番待ちする、というのは「日本式の考え」。こちらでは、入っている船の間に狭い空間を見つけると、まず片方の船にドーンと先端をぶつけてスペースを広げ、次にその反動を利用して反対側の船にブツケルようにして、船体を入り込ませて行くんです。これが「ベトナム式のやり方」で、どこからも文句はないのでしょう。日本ではこんな荒っぽいやり方は見たことないですが、細かいことにこだわらない大らかな社会です。ブツケルことを想定して、船体の周りには全部、ゴムタイヤが張られていますからね。

## ◎歩く



中部ベトナムの古都ホイアンから、車で一時間。山中の盆地に入っていくとミーソン聖域という遺跡があります。紀元前から中世にかけてベトナム中南部で栄えたチャンパ王国の古い寺院とのことでした。この時もまた、ヒドイ雨に降られました。バスの駐車場からはかなりの距離があるとのことで、雨の中を10人乗り位の電動カートで移動。立派に舗装された道路を走り休憩所に着くと、そこで雨が激しくなってきたのです。そこからは山道を歩いて目的地に行くとのことでしたが、雨カッパと傘では厳しい状況。しばらく待機しましたが、雨が止むどころか、だんだんと強くなってきたのです。行く先々で、雨が降るものですから、私達も今が「ベトナムの雨季」であるということがわかってきました。スコールというんでしょうか。雷や風も伴い、スゴイ降り方でした。

滝のように降り突ける豪雨を見つつ、始めは「遺跡を見に行けるだろうか」と心配していましたが、そのうち「無事に帰れるのか」という不安に変わり、「日本人旅行者、ベトナム山中で遭難」という新聞記事が頭に浮かんだですね。時間にして30分位の雨だったと思いますが、ずいぶんと長く感じ

滝のように降り突ける豪雨を見つつ、始めは「遺跡を見に行けるだろうか」と心配していましたが、そのうち「無事に帰れるのか」という不安に変わり、「日本人旅行者、ベトナム山中で遭難」という新聞記事が頭に浮かんだですね。時間にして30分位の雨だったと思いますが、ずいぶんと長く感じ

たですよ。ほどなく雨の勢いが治まったところで、雨カップに傘をさして歩行開始。最初は舗装されていましたが、まもなく豪雨でぬかるんだ山道に。そこを歩く、歩く、歩く……< 一体どこまで歩かせるんじやい！ >という感じでしたが、実際には 20 分位の歩行で、程なく目的地に到着。鬱蒼とした山中にその遺跡がありました。



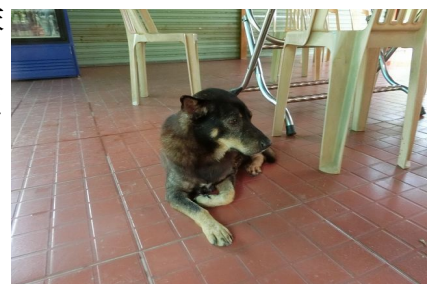
古いレンガ造りの寺院ということでしたが、私が受けた印象は「廃墟」という感じでした。ほとんど屋根がなく、建物の形がないのです。地面が広い範囲で大きく抉られた窪地が側にあり、現地ガイドさん曰く「これは米軍の爆弾が落ちた跡ですね」という説明。40 年以上前のベトナム戦争の時の米軍の爆撃で、ここにあった中世の宗教寺院のほとんどが破壊されてしまった

そうです。一部に屋根があり中に入れましたが、それは壁の色が新しく、明らかに最近になって修復した箇所だと分かりました。こんな山の中の古い遺跡を爆撃することもなかろうに、と思いましたが、「ベトナム戦争時には、ここが北ベトナムの拠点となった」という記事もありましたから、真偽のほどはわかりません。しかし、この廃墟が、ベトナムの人たちにとっては、古い遺跡であると同時に、戦争の惨禍を改めて思い起こさせるものであることは確かのようにです。



戦争の跡の廃墟と言え、同じ世界遺産である、わが広島「原爆ドーム」が思い起こされますが、全く違うものという気がします。こちらは千年以上も前の古い寺院ですし、建物を外から「見る」というより、「触れる」という感じですね。山中の草木に埋もれたような廃墟に、ズカズカと土足で入り込んで、そこら中を歩き回り、写真を撮る自由が撮りまくって、という感じですから、不思議な雰囲気を感じました。時間と技術さえあれば、もっと「いい絵」が撮れたのに、という気がします。今から思うと、建物がほとんど破壊されているからこそ、こんなことができたのかもしれない。もし爆撃に遭うことなく、ちゃんとした形で残っていたら、全く違った見方になったと思いますね。

遺跡の観光を終えて、歩いて休憩所までもどると、一匹の犬が床に横たわっていました。中型の雑種犬ですが、これがとても大人しくて、スゴク優しい目をしているんですよ。思わず頭を撫でてやりましたね。何処から来たのか、どうしてそこに居るのか、首輪もリードもなく、飼い主らしき姿も見えません。こちらではイヌはこんな状態であることが多く、繋ぐという習慣がないようで、旅行中に一度も繋がれたイヌを見ませんでしたね。日本における「ネコ」のような存在なのかもしれないですね。何故か、あんな山の中にいたアイツは、あれから何処へ行ったんでしょうかね……



バスから外の風景を眺めると、今の時期に稲刈りをしているんですよ。私の家の周りにも、まだ田んぼがかなり残っていますが、6 月初め現在、やっと田植えを終えたという状態です。小さな田ん



ばでも農業機械に頼る稲作になっている日本と違い、こちらでは昔ながらの鎌を使った稲刈りをしています。私には懐かしい風景でした。ガイドさんの説明では、ベトナムでは二期作は当たり前で、場所によっては(おそらく南部の方でしょう)三期作があるとのことでした。3倍の収穫があるかどうかは別にして、田んぼの面積が3倍あるようなものですね。



稲刈りの後の休耕田になるのでしょうか。牛が沢山いるんですよ。茶色の大きな牛なのですが、それが繋がれていないだけでなく、柵らしきものが何処にも見えないのです。自動車の走る道路のすぐ側の土地ですから、牛が道路に出たり、何処かへ逃げたりしたら大変だと思うのですがね。

ベトナムのイヌ達と同様に「牛さん」も、コチラでは見事にヒトと共生しているようでした。それにしても、団体のツアー旅行でなかったら、車を止めて、「人と牛の生活」の姿を近くで写真に撮れたのですが、そのことだけは「悔い」が残っています。

**「シブシブ出かけた旅じゃったが、オモロイ体験もエツとあったわい。そういう意味では、カミサンに感謝せんといけんかのう」**

(注1)ベトナム戦争('65~75)のあった当時に、作家の小田実、開高健、鶴見俊輔らにより結成された、無党派の反戦運動グループ。正式名は「ベトナムに平和を市民連合」。1973年に解散し、関係者の多くはすでに他界されています。なお、この運動が、「その後の日本とベトナムの関係に良い影響があった」ということについての、真偽のほどや詳細については、明らかではありません。

◎おことわり

今回のコラムはあまりに長大になり過ぎたため、前篇と後編の2回に分けて掲載させていただきます。なお、今回の文のテーマの付け方については、開高健著「白いページ」のスタイルをマネしました。次回は「買う」「泊まる」「食べる」「売る」などのテーマを予定しています。